

に他に適當なる作曲の教師がなかつたために、作曲法の教授が表藝たるチエロの教授以上に氏の重要な任務であつた觀する。従つてチエロ獨奏用の樂曲以外に、ピアノ曲、管絃樂曲、歌曲等の添削もしたので、ドイツ歌曲の造詣も深く、我聲樂家達に解釋上幾多の助言を與へた。日本を愛し、能く日本語があやつゝたので、ペツオールド、レーヴェ、マリア・トル等の諸家がまだ日本學生に馴れない頃は、氏が何くれとなく親切な助力をしてゐたやうで、柳兼子、武岡鶴代、鈴木乃婦子等の諸君は大に氏を徳とし、澤崎定之、梁田貞、矢田部勁吉等の諸君もウェルク先生、ウェルク先生と、氏の名を口にする時には一種敬愛の念を以つてするのを常としてゐた。今溢焉として其計に接し、氏の功績に對し追憶の情禁じ難きものがある。

（月刊樂譜）第二十五卷第九号 昭和十一年九月 一一〇～一一一頁

〔同誌同号には、この他に鈴木信子、平井保三、松島義、中島方によるウェルクマイスター氏への追悼文が掲載されている〕

(II) ハンカ・ペツォルト Hanka Petzold

在職期間 明治四十二年～大正十三年（一九一〇～一九二六）

専修外国人教師

担当科目 ピアノ、唱歌

履歴（要約）

一八六二年ノルウエー南部のクリスチヤンサンで生まれ、父親が市長を務めていたベルゲンに移る。子供の頃、ショパンが得意だった母親からピアノの手ほどきを受け、当時高名なヴァイオリニストだったオーレ・ブ

ル主催の演奏会でデビューを飾る。その後パリでトメ、ドラボルド、ガエルにピアノを学び、さらにヴァイマールに渡つてリストに師事した。また、このころ声楽の道も志すようになり、まずパリに戻りマルケージに、次いでドレスデンでオルゲニに師事し、バイロイトでコジマ・ヴァーグナーからヴァーグナーのオペラを学んだ。コペンハーゲンの王立歌劇場で、ヴァーグナー『タンホイザ』のエリーザベト役でデビューを飾り大成功をおさめ、その後ヨーロッパ各地でピアニスト兼オペラ歌手として活躍した。

一九一〇年（明治四十三年）十二月八日ヴェルクマイスターからの紹介で、仏教研究家でドイツ人の夫ブルーノ・ペツォルト（第一高等学校教授）。なお、ハンカは結婚後ドイツ国籍を取得）とともに来日・着任した。一九一一年（明治四十四年）十一月二十二日ロイテルとともに奏任に準ぜられる。

一九一二年（明治四十五年）一月十五日前年十二月に自宅が全焼したため、東京音楽学校で慈善演奏会が開かれた（三浦環らが出演）。

一九一四年（大正三年）十一月五日高等官五等以上に准ぜられる。

一九一五年（大正四年）七月十日契約時間外に、唱歌授業に関する特別調査を嘱託される。

一九二二年（大正十一年）二月二十六日弟子たちにより謝恩大演奏会が東京音楽学校で開かれた。九月三十日ショルツ退職後の後任決定までの間、臨時に契約時間外の授業担当を命ぜられる。

一九二四年（大正十三年）三月三十一日契約期間が切れたため、退職。在任中には、三浦環、柳兼子、永井郁子、船橋栄吉、矢田部勁吉、關鑑子らを育てた。

退職後も東京で後進の指導にあたり、在任中に引き続き多彩な演奏活動も行つた。

一九二七年（昭和二年）五月ベートーヴェン生誕百年祭の功労者として、ゾルフ大使より記念品を贈られる。

一九〇四年（昭和九年）五月九日漁口號「十五周年記念」にて生研究發表
演奏会が日本青年館で開催された。
一九〇七年（昭和十二年）四月十九日前田より心臓病に入院して、いたた
ぬ、弟子たちによへて恩師慰安の大演奏会が日本青年館で開かれた。八
月十四日東京にて終。

(一) 十一月一日おひの契約だつたが、船の都合で来日が遅れ、八日の着仕とな
なった。

東京音楽学校校長湯原元一宛書簡と、湯原からの回函。ペシヤルト
音楽学校からの招聘を受け、ひと履歴書と手紙を回函する旨を以
て、それに対して湯原は契約書を回函する旨と來日旅費を支払う用意
があふ血を述べてある。

S. Hochwohlgeboren
Herrn Yuhara
Director der Kaiserliche Uyeno Musikacademie
Japan Tokio

[報簡表書類・手書類]

To Mrs. Hanka Petzold

[手稿類]

14/10 1909

(「昭和十二年秋大正十一年 外國人教師關係書類」)

Dear Sir.

As I hear from Mr. Werkmeister that there is a vacancy
of the Uyeno Academie of Music, and that you are offer-
ing me this position

I beg to inform you, that I feel very much honoured by
your office, and that I am willing to accept it.— Including
I send you my biographie and a few criticism. Will you

be kind enough, to send me the contract, in order to sign
it, and to let me know all necessary detail about the work
to be done as the Academie?
I could arrange to arrive at Tokio in the first half of
November and hope, that we shall come to terms.

Your very truly
Hanka Petzold

[手稿類]

November 11th 1909

Dear Madam,
I am very glad to inform you that the Tokyo Musical
Academy has decided to receive you as a teacher of sing-
ing and piano-playing and including send the contract to be
signed by you. As for your travelling expense, we will
pay it you on your arrival here.

Yours Truly
M. Yuhara

[報簡表書類・手書類]

Biographical Note
Born of Christiansand in Norway, I got my first musical
education from my mother, a highly gifted lady, who
played beautifully Chopin. Afterward, I went to Bergen in

Norway, where my father a lawyer, hold the position as a governor of this town. At Bergen I made as a child my first public appearance in a concert given by the "King of the Violinists"—Ole Bull. Then, with my brother and sister, I came to Paris, where I studied the piano very carefully first with the Messieurs Thomé and Delaborde of the Paris conservatoire, and afterward with Madam Gaëll, an excellent and very personnel [sic] artiste [sic].

After year of study I made up my mind to go to Weimar to get the last finish from the great maestro "Franzis [sic] Liszt", who has initiated me in the secret of his Transcendant Art.

— Not satisfied with being a thoroughly traind pianist, I endeavoured to become a singer as well. So I studied several years with the famous "Mathilde Marchesi" at Paris, then with Frau Orgenie at Dresden, and went to Bayreuth, to get instruction as a dramatic singer from Frau Cosima Wagner. As opera singer I made a very successful debut at the Royal Opera at Copenhagen in the role of Elisabeth in Wagners [sic] Tannhäuser.—I have given lots of concerts in Norway, Denmark, Schweden [sic], Germany, Switzerland, France and England, and all of them have been successful. In London I was compared by the first critics with Sofie Menter and Essipoff, in Munich with Teresa Carreno.—I may say that my singing also has pleased everywhere and my Italie school very much admired. Besides my artistic work, I have always given lessons in

singing as well as in playing and have also had great success as a teacher. I am looking forward to a very satisfactory work at the Uyeno Academie and hope that Japanese people will like me.—

(明治廿一年秋大正十一年 外國人教師關係書類)

[手書稿]

觀察係に關する文部省宛通知案。外國の人に同伴判定の家族が記され
てゐる。

通 知 案

明治廿五年十一月八日附秘書課甲第六〇號御照會ノ勸櫻會リ召サル
ベキ五箇節以上取扱ノ外國人ハ左記ニタリアリマスカラ宣敷御願ヒ
ハ致シヤバ

年 田 田

文部大臣加房祕書課長殿

記

外國人教師 Hanka Petzold
Paul Scholz
Gustav Kron

好人母堂母堂

但シクスタークローハ木母リ田リ田傭入シタル
ヤ元講師リテ大正九年十月一十五日奏任五等以上リ
拂シ取扱ハル、コム、ナコタニ

[手書稿]

日本人と西洋音樂

ハンカ・ペツオルド夫人

如何にして西洋の音樂を學ぶべきか

如何にして西洋の音樂に親しむべきかと云ふ問題に就て少々申述べたいと思ひます、是が音樂に親しまるる學生方や又は新しい方面に向つて思想を開拓されて居られる方々に取て何かの御参考となるなら、妾の満足は此上ないのでござります。

さて日本人をして西洋の音樂に親しむ様にさせる事は中々困難な事と思はれますと云ふのは申す迄もなく日本の音樂とは是非共日本教育のある方々が西洋の音樂を出来るだけ真似を爲すつたら其の真似が段々と實在に近づいて遂には一種のオリジナリティーを形成する様になる事と存じます。

是は唯に音樂のみではございません、洋畫と云ひ、其他あらゆるもののが殆ど九分通りまで真似に依つて出發して、長い時間の経過後遂に成功の域に達するものでござります。

妾は此の點に於て過去三十年の歴史を有して居る日本の樂壇にも、最早音樂會に出て相當に聽かれる程度の樂人も出來れば、又妾が音樂會を致しますにつけ相當の紳士方から非常に高い理解を持つた手紙が参りますことなど、演奏する方と聞き分けると云ふ二つの方面から見て、中々心丈夫な感じが致しますので御座います。そして其の方々が能くベートーベン、ワグナー、ブラームス又はストラウスと云ふ様に時代を追うて夫々お聞き下さる態度も異なる様になつたのも、最も喜びにたへぬ次第で御座います。

日本の藝術でも、西洋の藝術でも皆同じ事で、藝術は自分的一生を掛けやらねばならぬものでございます。ですから、音樂を勉強せんとする方が一朝にして總ての作家を知ると云ふ事や、早く一技に熟達すると云ふ事は全く誤った考へだと思はれます。

獨逸の一語千々金に「アイル・ミット・ワイル」「つまり時と共に進まざるべからず」又は「スマ・ディス・リネア」之は書をかくに毎日精神の籠つた一線を書の上に加へて一生に一枚の大作をものしたと申す事でございますが、此等二つの金言は是非とも守つて行かねばならぬ事と存じます。

斯様にして虚榮と云ふ事は全然忘れて一生懸命勉強し、而して、出来るだけ新しいものを研究するのでございます。つまり新しい事を知らねば眞の古聖の樂を研究し理解する事は出来ませぬ、又一藝に秀てる事が必要であります、何となれば自分が之を以て人に示すのであるといふ立脚點を明かにせねばなりません、要するに一藝に秀てる様に勉強する事は三四の事を淺く知つてゐるよりは餘程いゝ事でござります。

音樂研究の諸手段

さて音樂を勉強なさる上に於て、妾は獨逸の音樂が一番便宜だらうと存じます、何となれば此處三十年間の獨逸音樂の發達は實に驚くべきものがあります。そして音樂を研究せんとするものは語學を大に勉強せねばなりません、それが爲にも獨逸語は中々便利であります、即ち今日の日本の醫學上では殆ど獨逸語が用ひられて居りますから此上音樂の方面に獨逸語が研究されたならば、相提携して音樂の構造洋樂の歴史及び大藝術家の生涯に接する事が出來、又一つ

の國語の上達は引いて、他の外國語の研究に便宜を與へて、非常な幸福を持來す事と思はれます。

此處に特に附加へて置きたい事は、昔の大なる音樂家は常に能く教育され能く研究した處の人であつた事であります、又音樂の研究には良く旅をする事が必要でございます。佛國へ行き伊太利に行く等は皆其人の腦を開發して更に偉大な藝術を養ふ動機となります。併し今日の青年方が、突然獨逸なりへ行かれて音樂の研究などに從はれます、それよりは日本に良い西洋の教師を雇はれて、よく馬に乗れる様になつてから其の馬を御する法を習ふと云ふ様な方法の方をとられた方が當を得た事と思はれます。

それから、更に音樂を習ふものは良きものを食し、能く運動して十分の體力を養はねばなりません、と申すは音樂家は、中々其の頭脳を使用するものですから常に、活動的の力を貯へて置かねばなりません、之はいづれにしても大切な事で御座います。

理想的の音樂教師

又音樂の教師は最も經濟的の才能、言葉をかへて云へば其の教へた事をして常に有功に生活せしめて置く事の才能を有せねばなりません。

即ち其の一は、理論よりも如何に唱ふべきか、如何〔に〕彈すべきかと云ふ事を示さねばならぬのでございます。

妾は常に、自ら唱ふ事を教へます。そして、それに對して説明は餘り加へませぬ。妾の希望は生徒をして出来る丈け自由にそして藝術的に行動させるといふことでございます。そして又日本人としての品性を損ずる様なのは禁物でございます。

併しながら音樂は實に感情的の業でありますから稍もすると一方に偏したり面白からぬ事を呈します。でございますから教育の材料としても、出來る丈け各國のものを混合してやらねばならぬもので、妾は常に其處に心掛けて居ります。勿論音樂の教育は上野の東京音樂學校の様に教師と音樂の唱ひ手を作る處と、帝國劇場の歌劇の様に歌劇の生徒を養成する處とでは元より其の教育は全然異なるものでございます、即ち歌劇の方では更に舞踏の稽古を加へて行く様なもので、私の教へて居りまする帝劇の歌劇部も之から三年もたつたらいゝ歌劇をやる事が出來るであらうと楽しんで居る次第で御座います。

又獨逸の諺に「オーネフライス・カインープラース」と云ふのがあります。「生産的でないものは値打ちがない」と云ふ意味で、妾も何とかして自分の關係してゐるものをして、生産的に値打あるものとしたいと存じて居ります。又蓄音器から西洋の大作を習ふものの一の便宜と思はれます、ともあれ、日本が、數千年的歴史を有する外國と比較して僅僅三十年の間に、かかるまで西洋樂の發達を爲したのでございますから、此の習ふ方と教へる方の兩方から進んだら、さぞ面白い事が出来るだらうと、日本の洋樂の前途に大に囁望して居るのでございます。

東西洋音樂の融合

最後に妾が申述べたいと思ひますのは、西洋の樂器と音樂と日本樂器と音樂とは、其の源を一にして居るといふ事であります。まづ、日本の三味線琵琶、琴、笛等の類は千年程前に朝鮮から來たのか又は支那ヒリツピンの邊から來たものかと云ふ事は學者の説明で

明かな事になつて居ります。而して其の古代に遡りますと、是はヒンドスタンの樂器でありまして、其の樂器は又西の方希臘の方にも參つて居りますのが西洋樂器の起源と爲つて居ります。

斯く申しますれば、東西いづこも相同じ意味になりますから、は何とかして、雙方から接近して此處に世界的の偉大な音樂を作りたいものであるとの希望から、曩には伊澤修二氏の研究があり近頃では、岩崎男爵松方正作兩氏のフィールハーモニー會などが設立されて、閑院宮殿下の御臨場を辱うすると云ふ具合になつて参りましたのは誠に喜ばしい次第で何とかして賢明な日本の紳士貴婦人方の援助に依つて吾々の希望を満足させる事が出来る日を待たねばなりませぬ。

妾は此の點に於て湯原音樂學校長其他の方々に非常なる感謝を以てる一人で御座います。(大阪朝日)

(「音樂界(帝國樂事協會)」「樂潮」欄 大正三年四月 七三~七五頁)

〔訃報記事と乘杉校長による弔辭〕

ハンカ・ペツオルド夫人逝く

元母校教師で、久しく我が樂壇の母と稱せられ、麻布簞笥町六七に在住してゐられたハンカ・ペツオルド夫人は持病の心臓病で三月築地聖路加病院に入院中であつたが、十四日午後二時半遂に逝去せられた。享年七十三。

夫人は獨逸生れのノルウエー人で、佛蘭西のマルケージについて發聲法を習ひ、獨逸に歸つて晩年のリストからピアノを習つた人で、一時はオペラの舞臺に立つたこともあつた。明治四十二年來

朝、母校教師としてピアノと聲樂とを擔任し、現在我が樂壇で活躍してゐる多數の高才駿足を薰陶して、大きな功績を殘した人である。大正十三年辭した後も、東洋音樂學校講師や個人教授などで樂壇の向上に餘生を送つてゐた。また夫君は佛教の權威として有名な元一高教授ブルノー・ペツオルド氏である。

九月十二日日本青年館で門下生によつて女史の葬儀が行はれたが、各方面から多數の會葬があり盛儀であつた。

弔辭

我ガ國音樂教育ノ功勞者ニシテ聲樂家ノ母ハンカ・ペツオルド女史終ニ逝ク噫々悼ムベキ哉

顧ルニ女史ハ明治四拾貳月我ガ東京音樂學校教師トシテ就任シ大正拾參年參月其ノ任ヲ退クマデ在職實ニ拾又六年本校創立以來ノ外國人教師參拾餘人中、在任期間ノ記錄ハ正ニ女史ノ保有スル所タリ然カモ本校ヲ退キタル後引續キ在朝シテ本邦音樂教育ノ爲ニ盡瘁スルコト前後ヲ通ジ參拾年ノ永キニ達シ殆ンド其ノ後半生ヲ之ニ捧げ而シテ女史ノ薰陶ヲ受ケシ濟々タル子弟ハ今ヤ我ガ樂壇ノ指導者トシテ將又中堅音樂家トシテ斯界ノ上層ニ飛躍シツ、アリ洵ニ我ガ樂界開拓ノ恩人トシテ稱揚スルヲ憚カラズ其ノ功績偉大ナリト云フベシ

茲ニ東京音樂學校並ニ同聲會ヲ代表シテ追悼ノ辭ヲ獻ゲ在天ノ靈冀クハ之ヲ饗ケヨ

昭和拾貳年九月拾貳日

東京音樂學校長正四位勳二等 乘 杉 嘉 壽

(『同聲會報』二三六号 昭和十二年九月)